野球をしよう！

クローバー☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野球をしよう！

【Ｎコード】
Ｎ５２４７Ｄ

【作者名】
クローバー☆

【あらすじ】
ちょっぴり恥ずかしがりな男の子（高一）権は監督の誘いで野球部に入る。男の子でも女の子での楽しめるような風にしているつもりです。よかったら覗いてくだされ。

第一話　野球をしよう！（前書き）

ぅわぁ～～・・・私が野球小説書くのは生まれて初めてです！なので結構下手だと思います（汗）
こんな小説でよければごらんあれ♪

第一話　野球をしよう！

「野球をしよう！」

・・・横川健。高校一年生です。大変な事になっちゃい・・・ました・・・。

＊＊＊＊＊＊

「僕は野球部監督。野球部出来たばっかりだから部員を集めているんだ。どぉ？

・・・それとね・・・。」

「ぁぅ・・・。」

「なんでそんな僕から離れて話すんだよ！もっと近づいて！」

健は恐る恐る近寄っていく。

「な・・なんで俺を？」

「中学校の時野球してなかったっけ？」

（なんでしってるのですかぁあ！！？）

「ドコやってたの？」

健は黙り込む。

「・・・。」

監督はやれやれと肩をすくめて、

「どこしたい？」

と聞きなおした。

「・・・キ・・・」

「？」

「キャッチャーしたいです！！」

「ふぅん。いいよ。する人いなかったしね。後、三塁とマネージャーだけだなぁ・・・」

監督は手をくんで考え始めた。

「あのぅ・・・俺の友達で一緒に野球してた人がいるんですけど、どうですか？セ・・セカンドです。」

恐る恐る健は言ってみた。

「おぉ！紹介してよ！健くん！」

健たちは1―Aへ向かった。

「た・・高橋くん！！」

健は高橋という男を呼んだ。

高橋はやわらかくきれいな茶色の髪をしていた。

「なんだ、健じゃん♪どうしたの？」

「三塁の人探してて。こっちは監督さん。」

すると監督はぺこりと礼をし、「どうも」、と挨拶した。

「ふぅん・・・セカンド。」

高橋は腕を組みうなった。

「またやってみても・・・いい・・かも。」

と高橋はいった。

「おぉ、よかった。後はマネージャーだけだね。とりあえずマウンドにいこう。」

監督はマウンドへむかって歩き出した。

＊＊＊＊＊＊

「整列！」
監督はマウンドにいた人たちに声をかけた。
「えぇっと、健君、高橋くんだ。自己紹介をして。」
「はい！俺ピッチャーデス、前紀　雄太でっす！」
「・・・俺は、レフト　沢　まずさ。」
「僕は、ライトの鈴川　功。」
「俺！俺はショートの荒井　健介。」
「・・・サード、花紀　称。」
「はいはぁ～い！ファーストの世津　準！」
「ベンチの、浅井　紺。」
「・・・・あれ？」
監督は首をかしげた。
「センターの笹野は？」
すると浅井がてをあげ、

「マネを探すっていってしまいましたぁ～～。」

「あぁ～～・・・。」

監督はぽんっと手をたたいた。

「おぉ～～い！監督ぅ～！」

「「「あ。笹野。」」」

みんな声をそろえていった。

「あれ？新入りじゃん、俺笹野賢一（ささのけんいち）。」

賢一は自己紹介を済ませ、

「マネージャー捕まえたで！ほら！！」

すると賢一が後ろにいた女の子を前に突き出した。

「わわっもっと丁寧にしてよ！」

その女の子は、髪をみつ網みして二つに分けているかわいらしい女の子だった。

「あ・・・留美！」

健が留美という女の子を指さした。

「あら、健じゃないの・・・。」

二人は知り合いのようだった。

第一話　野球をしよう！（後書き）

～野球部室～

作者「ここでは、小説について話まくるよ！
ちょっと！健！もっとこっちに着て！！作者にまで
恥ずかしがってこれからどうすんの！？」

健「ぁぁう～～・・・。」

作者「登場キャラ多すぎて読者さんこんらんしたでしょう、すみません。」

監督「そうだね。僕は覚えてもらったかな？」

前紀「俺、ぜってー『この人誰？』とか思われてるって！ピッチャーのま・え・き　だぜ？」

作者「あっははは・・・じゃあねん！」

第二話　ミンナの性格（前書き）

作者「人多すぎて留美出すの忘れてた。」
留美「いいもん！しっかし笹野ってば！もっと私を大事に扱ってほしいよ！」
作者「無理だね。留美の性格的に。」
留美「どういう意味！！？」

第二話　ミンナの性格

「あ！留美・・・。」

と健は声をだして留美という少女を指差した。

「あら？健じゃないの。」

二人は知り合いのようだった。

しかも親しいらしい。

「あららぁ～？もしかしてお知り合い？」

健介が健の肩をぽんぽんたたきながらいう。

「えぇっと・・・幼なじみ。」

ぽそっと健がいった。

その言葉に、健介が

「へぇ～・・・・。」

とつまらなそうに土をけっていた。

「あのさぁ～～、」

と準がてをあげた。

「そろそろ練習しないとやばくね？てかもう帰る時間・・・。」

その準の言葉にみんな「あ。」と口をぽかんと

あけていた。

「・・・キャッチャー。」

功が健のほうをみたので健はすごくびびった。

（俺！？俺！？キャッチャー俺だよね！！？）

「えぇっと、横川健です！」

「どれだけ出来るの？」

紺は健の方に向かってくる。

健はさらにびびる。

（ひぇえええぇぇぇぇ！なんかやばかったか！！？）

「ぇえっと、中学の時にキャッチャーやってたけど、

部員が集まらなくって・・結局試合できなくって。」

すると功が、

「だから？」

とせまってくる。

「ちょ・・ちょっとできる。」

「あそ。」

功は向こうに歩いていった。

するといきなりピッチャーの雄太が

「ねぇねぇ！明日日曜だからみんなでどっか出かけね？」

「い～ねそれ！！」
準も乗り気だ。
すると称が
「めんどぉ。」
とひらひら手で顔をあおいでいる。
称はめんどくさがりな性格のようです。

「称って私服ダサイからこれないんじゃぁねぇの？」

「！！？健介・・・！？」
すると称の目に殺意の炎がともる。

健介は続けて、
「私服見せられないなんて終わりだなー！！」

ぷっつーーーーん！
称の頭の何かが切れる音がした。

「ぁ・・・二人ともぉ・・・。」
おろおろしている健をよそに

「見せればいいんだろ！？私服！！」

「お、称くるか？」

「行くよ！！！」

すると雄太が健介に近づき、

「「イエーイ！」」

パチンッ・・・・

雄太と健介はてを叩く。

その瞬間

「あ・・・。」

我に帰った称。

はめられた！と思いながらもう面倒くさくなってきて

怒る気も無くなった。

「他の人もいくよねぇー？」

手をぶんぶんふりまわす雄太。

すると紺が

「いくいく～～！だって、俺忘れられてそうるじゃん！」

「もう忘れられてるって！」

「おい、賢一それひどくない？てか俺なんだか

いじられキャラになりそう！！？」

「なってるから。」

びしっという賢一。

「でもべつにいじられキャラでもいいカモ・・。」

ぞわぞわ！！！

「お・・・おい！みんな！紺ってMだぞ！M！」
とたんに騒ぎ出す賢一。

「え・・・そーなの??」

「信じないで健！！」

「でもMですよね?」
にっこりしながら高橋はいった。

「高橋！！?敬語キャラと思いきや実は鬼！！?
もぉ・・・！まずさ！！へるぷみぃ～～！」

するとまずさが

「・・・・・。」

「し・・・シカト！」（ガーン）

「わぁわぁわぁ・・・・。」

そんな野球部は、気がついたらもうあたりは暗く、
近くを通った先生方にみっちり説教されたとさ。

第二話　ミンナの性格（後書き）

〜野球部室〜

作者、キャラのプロフィール紹介！」

横川健（よこかわけん）

所属　阿ノ宮高校１－Ｃ

性格　はずかしがり？

誕生日　二月二十七日

血液型　ＡＢ

背番号　２　打順　未定　キャッチャー

家族構成　母

第三球　実栄にて。（前書き）

この次の回で普段編は終わり。
練習編へはいるよ！

第三球　実栄にて。

「ぁぁ・・・。」
頭を抱える健。

「迷子になっちゃったぁ～～！！」
どんだけ子供なんですか。アナタ。

＊＊さかのぼるほど１０分＊＊

「着いたぁ～！」
雄太が嬉しそうにそこらじゅう走りまくる。
野球部は（マネージャーも）、巨大スーパー　実栄（ミエイ）に来ていた。
目的は、野球部結成の記念と、打順決めであった。

すると、そんな目的忘れたように準が、「俺、お腹すいたぁ！」といって中へ走っていった。

「俺も行く！」と雄太と賢一、健介も続く。

「あ・・・まって・・・・。」

と高橋がとめたときにはもう遅かった。

「あ～～あ。これだからめんどかったんだよ。」
称はすでにつかれている。

「探しにいこぉ・・・。」
健のその一言で皆は、あるきだした。
きょろきょろとあたりをみわたす留美。
どうやら、留美は服が欲しいようだ。
「ちょっと、皆！先いっててて！服見てくる！」
留美は、服屋へはしっていった。
その時、
どどどどどどどどどどどどど！
あとすこしで始まるバーゲン目当てのおばちゃん達が
健たちの目の前を通りすぎた。
その最強おばちゃん軍団の波にあっさりのみこまれた
健は、バーゲン会場へ運ばれていった。
「あぁぁっぁぁぁあ！」
そして現在にいたる。
「どうしよぉおぉお！！？」
パニック状態の健。

＊＊雄太達方面＊＊

「ねぇ、ゲーセンいかね！？」
雄太が提案する。
「バッティングゲームあるよ！」
「いーなそれ！！」
「メダルゲームあるかな！？」
準と賢一と健介も賛成だ。
そして四人は、ゲームセンターへ向かっていった。

＊＊紺、称、高橋、まずさ方面＊＊

「・・・・・なんであいつら。」疲れた様子で紺は言う。
「・・・・・。」
「だからめんどいんだって！まったく！」
「ふぅ、あの人たちの事ですから、ゲームセンターへいってますよ。」
高橋がなぐさめる。
「そうだな・・・・。」

＊＊健方面＊＊

「っでででで電話！」

ピピピピ！準へ電話をする健。

「もしも～し！健？」

「あ、うん。」

「おれら、ゲーセンいるんさ。来なよー。」

「わかった・・・・。」

ツーツーツー・・・・

「ゲーセン！・・・・ってどこ？」

なんとか、ゲームセンターについた健。
そこには、高橋らと合流した雄太の姿があった。

「ぉお～い健！こっちこっち！」

雄太が呼び寄せる。

「今からな、みんなでプリクラ撮りたいんだけどな。」

「ぷり・・・？」

賢一が指差したさきには、こう書いてあった。

〔男性の方だけでは撮らないでください。女の子限定。〕

とかいてあった。

「！！おれにいい考えがある。」

とだけいって、雄太は走り出した。

雄太君どこいったんだろ・・・・。健はきょとんとしていた。

第三球　実栄にて。（後書き）

前紀（まえき）　雄太（ゆうた）
所属　阿ノ宮高校　１－Ｃ
性格　明るい。
誕生日　五月五日
血液型　Ｏ
背番号１　打順未定　ピッチャー
家族構成　母、父、兄

第四話　おごり

雄太が、走っていった少し後、

『ピンポンぱんぽ～ん♪』

『迷子のお知らせです。留美さん、留美さん、迷子センターまでおこしください。』

「！？雄太君！」

健は、このことかとポンッとてを叩いた。

賢一が、

「早く迷子センターいこうぜぃ！」

と皆をつれ、走りだした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

迷子センターには、留美によって、ぼこぼこにされている雄太の姿があった。

「ほんっと最低！最悪！」

「「「「「恐い！！！」」」」

みんなは、近くのファミレスによって、打順を決めることにした。

決め方は、はなしあい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、

一番、賢一
二番、雄太
三番、まずさ
四番、高橋
五番、功
六番、称
七番、準
八番、健
九番、健介

という風にきまった。
これからの試合が楽しみです。

「そういえばさぁ～」
準が口を開いた。
「監督が、「今度練習試合しよっかな～って」いってたよ！？」
「まじ！？」
一番雄太がはしゃいでいる。
「めんどい。」
称がいつものペースではなしていると、
健がドリンクバーから戻って来た。
「健、オレンジジュースすきなの？」
健介が話しかける。
健のコップにはジュースがナミナミに入っていた。
「う・・・うん。好き。」
留美が、
「健ったら、小さい頃からオレンジジュースばっかのんでるのよ！？」
とあきれたようにいった。
「ぁぅ・・・・・。」

紺は、なぜか大量にパスタを頼んでいた。

「紺、そんなにパスタ食って・・・金あんの？」

と賢一が聞いたが、紺は

「大丈夫」

とだけいって食いまくっていた。

＋＋＋

紺がパスタを食べ終わってから、会計に向かった一同・・・のはずだったが、

称を残して皆逃げた。

「あわわ！俺、ドリンクバーの金はらってないよぉ！？」

健は雄一に引っ張られている。

「いいのいいの！」

「・・・あいつら！」

称は、しかたなく一万二千円を払って、皆のほうに向かった。

後で、、、

「あの・・・称、ドリンクバー分。」

健が称に五百円を渡そうとしたが、

「いいよ、おごり。」

といって、受け取ってもらえなかった。

健はすぐにはしっていった。

「称って、太っ腹なんだぁ～！」

なんていいながら。

ところが称は、

「財布に入れるのめんどい。」

それだけの理由だった。

第四話　おごり（後書き）

都合により、最終回となってしまいました。スミマセン。
できたら、試合編として、また書きたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5247d/

野球をしよう！

2010年12月21日07時02分発行